The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	はじめに
Author(s)	木村, 茂雄; 小杉, 世
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2021, 2020, p. 1-5
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/84996
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

はじめに

１．*Cultural Formation Studies* Ⅲの刊行に際して

この報告書は、大阪大学大学院言語文化研究科が主催する「言語文化共同研究プロジェクト」のひとつとして 2020 年度に進めた共同研究 Cultural Formation Studies (CFS) の報告書である。CFS は、大阪大学大学院言語文化研究科教員、同文学研究科教員、名古屋外国語大学教員、バングラデシュのイスラム大学人文社会科学学部教員、言語文化研究科の大学院生などを「正規」メンバーとする研究会だが、そこには言語文化研究科を修了して大学の教職についているものなど、「非正規」のメンバーも数多く参加している。そして、東京、名古屋、金沢、岐阜などから集まってくるこれらのメンバーを抜きにして、この研究会は成り立たない。これらの OG / OB が現役の院生たちに与えるアドバイスや刺激も、たいへん有意義なことと感じている。

研究会のこのようなメンバー構成には過去の経緯もある。Cultural Formation Studies (CFS) は、25 年近く前にはじめた研究会の「後継」の「後継」にあたるからだ。その最初の研究会は、1996 年の春に開始したカルチュラル・スタディーズの研究会「カルチュラル・スタディーズ・サークル (CSC)」である。「言語文化共同研究プロジェクト」の制度がスタートしたのは 2000 年度なので、その 4 年前のことになる。その後、2005 年度から 2017 年度までは「ポストコロニアル・フォーメーションズ (PCF)」と研究会の名称を変え、どちらかといえばポストコロニアル研究に焦点を絞った研究を進めてきた。

研究会の名称をこのように変えてきたのは、ひとつには、その時々のメンバーの関心を反映させたためである。この数年は、とくにアメリカ文学・アメリカ文化を専門とする教員や院生のメンバーが増えてきたようだ。しかし、1996 年当時から現在にいたるまで、研究会の名称は変わっても、また、そのメンバーに多少の入れ替えはあっても、文化や文学の研究に対する私たちの基本的な姿勢や視点には、ある連続性が保たれてきたように思われる。簡単にいえば、ひとつには、文化や文学を社会に開かれたものとみなし、その相互関係や相互作用を（必要に応じて「学際的」に）捉えようとする姿勢、そのことにとも関連して、もうひとつは、それらの文化や文学が形成されるプロセス（フォーメーション）を注視しようとする姿勢である。

そして、このような姿勢は、私たちがカルチュラル・スタディーズやポストコロニアル研究から学んできた姿勢にほかならない。2018 年度から研究会の名称を Cultural Formation Studies (CFS) と改めたのは、カルチュラル・スタディーズやポストコロニアル研究の基本

姿勢から学びつつも、特定の狭い「分野」に特化した研究会という印象を避け、その門戸を、より幅広く多様な領域に開いていきたいという意図が込められている。

２．2020 年度の CFS の活動

CFS の研究会は、ここ数年、原則として毎月の最終土曜日に開催してきたが、今年度は新型コロナの影響で年度始めの開催を見合わせていたため、Zoom で 3 回のみの開催となった。本研究会では、たいていは文化や文学にかかわる英語文献を取り上げ、それぞれの担当者がその内容を紹介し検討した後、全体討論に入る。このようにして、先行研究の趣旨や意義、欠点や盲点などを議論していく。それはまた、私たち自身の批評意識や批評の言葉を鍛えていくプロセスでもある。

2020 年度の最初の研究会は、昨年度からの継続で、ガヤトリ・スピヴァク（Gayatri Chakravorty Spivak）の *Readings* (Seagull Books, 2014) を取り上げ、最終回はジュディス・バトラー（Judith Butler）とスピヴァクの「対談」である *Who Sings the Nation-State?* (Seagull Books, 2010) の前半に取り組んだ。

以下に、研究会の記録を残しておきたい。開催日、章およびページ数、担当者の順に示す。研究科の修了生で大学の専任職についているものには、現職の大学名も付記しておく。

1. 2020 年 9 月 12 日 （Gayatri Chakravorty Spivak, *Readings*. Seagull Books, 2014.）
   “What Happens in the Text?”
   pp. 111-127.　石倉綾乃
   pp. 127-141.　小杉世
2. 2020 年 12 月 19 日 （Gayatri Chakravorty Spivak, *Readings*. Seagull Books, 2014.）
   “Teaching and Autobiography”, “Closing Remarks”
   pp. 142-153.　歳岡冴香 （近畿大学）
   pp. 153-165.　杉浦清文 （中京大学）
3. 2021 年 3 月 6 日
（Judith Butler & Gayatri Chakravorty Spivak, *Who Sings the Nation-State?* Seagull Books, 2010. ）
   pp. 1-29.　稲垣健志 （金沢美術工芸大学）
   pp. 29-60.　森野豊

３．*Readings*「結語」より（木村）

スピヴァクの *Readings* をこの研究会で読み始めたのは 2019 年の 7 月のことである。しかし、その後はコロナ禍の影響も受け、2020 年 12 月にやっとその検討を終えた。ほぼ 1 年半かかったことになる。それだけの時間をかけても充分に読みごたえのある本だったと思うが、個人的にはまだよく理解できていない部分も多い。ちなみに私は、昨年度のこの報告書の「はじめに」のなかで、「この本の検討もまだ道半ばなので、できれば別の機会に、こ

の本の私なりの「読み」を紹介することができればと思う」と述べた。その一部は今年 3 月に刊行された拙文「クッツェーを読むスピヴァク――他者を知る／語るということ」（『Artes MUNDI (Vol.6) 』名古屋外国語大学ワールドリベラルアーツセンター，2021 年 3 月）で表現することができたのではないかと思う。この論文のタイトルも、*Readings* の章のタイトル「ヘーゲルを読むファノン」、「スピヴァクを読む」などにあやかったものだ。この本でスピヴァクが取り上げていたクッツェーは、*Summertime* (2009) や *The Childhood of Jesus* (2013) など、おもに彼が 2002 年に南アフリカを離れオーストラリアに移住してからの作品である。しかしスピヴァクは、「サバルタンは語ることができるか？」のころから *Readings* にいたるまでほぼ 30 年間、クッツェーを読み続けてきた。その折々のクッツェーの読みが、この間の彼女の批評や思想の展開にとって重要な節目になってきたともいえる。その道筋を私なりに辿ってみた論考である。

これで *Readings* のスピヴァクを語り尽くせたとは思っていないが、いま新たに論を立ち上げる紙面の余裕も私の余力もないので、ここでは、その「結語（Closing Remarks）」のなかのいくつかの観点について感想めいたことを書き留めておきたい。その最初にスピヴァクは、この本の冒頭で述べた「無境界性（borderlessness）」という点に話を戻すという。そして「今日、資本は地球（globe）をボーダーレスに動き回ることができる」が、この無境界性は矛盾をはらんでいると指摘する（*Readings* 163）。彼女が別なところで述べていたように、為替取引などは各国間の経済的な境界を前提として利ざやを稼いでいるからだ。つまり、この無境界性は「遂行上の矛盾により、境界を無傷のままにしておかなければならない」のだ（*Readings* 163）。ここで彼女は話を「英語によるボーダーレスな比較文学」へと転回させ、言語の境界の問題を提起する。彼女がこれを語りかけているのは、インドの名門大学の一つであるプネー大学の英文学の学生だが、その学生たちにこう求めるのだ。「英語を引き受け、それを動かし、（あなたたちの母語だけではなく）他のインドの言葉に入り込めるようにしなさい。それらの言語の境界を打ち破るためにも、それを無傷のままに残しながら」（*Readings* 163）。

比較文学の枠をヨーロッパの言語だけでなく「第 3 世界」の言語へと広げていくことは『ある学問の死』（2003）あたりから彼女が訴えてきたことだが、それにしても、グローバリゼーション状況下の金融資本の動きと新しい比較文学の可能性を併置するこの文章は、直感的には分かりにくい。ここではたぶん、「グローバル性」に上書きする「惑星性」のビジョンを立ち上げながらも、「その両者を明確に対比することはできない」と述べた『ある学問の死』や『グローバリゼーション時代における美的教育』（2012）のスピヴァクを参照すべきだろう。つまり、（惑星的な）比較文学も（グローバルな）資本も、同じ世界状況に埋め込まれていることが前提とされているのだ。実際、プネー大学の学生たちがスピヴァクの求める比較文学への道を歩む可能性もあれば、インドの金融資本を操る担い手となる可能性もあるだろう。グローバリゼーション時代の「境界」について、スピヴァクは他のところでも、それを「尊重（respect）」するのではなく、それに「注意を払う／丁寧に扱う

（attend to）」ことを勧めていた。じつに微妙な違いだが、私たちがこの春に読み始めた *Who Sings the Nation-State?* でも、このような彼女の観点のありかを探っていければと思う。

さて、文学の読みについては、クッツェーの *Summertime* の中心に位置すると彼女が考えるマーゴーという女性の「祈り（prayer）」についての言葉などに触れながら、「批評的な親密さ（critical intimacy）」以上の状態である「取り憑かれることへの祈り（the prayer also to be haunted）」について語っている（*Readings* 164）。「批評的な親密さ」という言葉は「批評的な距離（critical distance）」という、どちらかといえば客観性重視の姿勢に対する抵抗を忍ばせた言い回しだろう。そして「取り憑かれる」という言葉は、自己の存在をどこかに残した「批評的な親密さ」以上に、他者のテクストに完全に憑依された状態を指しているといえそうだ。この言葉を彼女は『ある学問の死』でも何度か用いていて、その本自体、クッツェーの *Disgrace*（1999）に「取り憑かれている」ともいっていた。ちなみに近年の大学でも、Critical Reading や Critical Thinking といったことが喧伝されているが、他者のテクストに全身全霊で向き合い、それによって自己を変えていくという要素が、そこではどのくらい意識されているだろうか？

この直後にスピヴァクは、やや唐突ながら、英文学の教員がインドでなすべき社会的使命について述べている。「もっとも広い意味での英文学の教員の使命は、この狂気じみた場所、競争的で大量殺戮的でナショナリスティックな場所を、世界の国々のなかのひとつの国といえる場所（something like a country among global countries）へと回復させていくことなのだ」。それは、「勝利ではなく平等をモデルにするよう私たちを導いているテクストに倣って、この国に取り憑かれるようにと祈ること」（*Readings* 164）でもある。スピヴァクは他のところで、21 世紀がインドと中国を中心とする「アジアの世紀」と呼ばれていることにも触れているが、最後は若いインド人たちに、インドをグローバリゼーションの勝利国ではなく、いわば「普通の国」にするようにと求めるのだ。『ある学問の死』でも『グローバリゼーション時代における美的教育』でも、彼女は「惑星性」のビジョンと関連して、「人間らしくあるということは、他者に差し向けられているということなのだ（To be human is to be intended toward the other）」と述べていた。もしスピヴァクにとって「グローバル人材」ということが意味をなすとするなら、若いインド人への彼女のアドバイスは、他者に差し向けられた人間存在ということを前提とした「グローバル人材」へのいざないでもあるように思われる。

４．2020 年度をふりかえって（小杉）

2020 年度は新型コロナの影響で、何でもない日常が大きく変わった。ウイルスから見ればマンモス級の人間の生活が、目に見えない小さなウイルスの存在によってこれほどに変容することを目の当たりにして、「人新世」ならぬ「ウイルス新世」が始まるのかと思う 1 年だった。この共同研究プロジェクトも、2020 年 3 月に開催予定だった研究会が見合わせとなり、4 月からはオンライン授業というこれまで経験しなかった形態の授業を遂行するた

めに様々な新しい勉強をしなくてはならず、ようやく研究会活動を再開できたのは 9 月になってからであった。

Zoom でのオンライン開催は、議論がやりにくいのではないかという不安もあったが、この研究会の創設当時からの指導者で、名古屋外国語大学へ異動の後もかわらず研究会に参加されている木村先生はじめ、現役院生のほか、修了生として各地で活躍しているメンバーの積極的な参加のおかげで、継続することができた。対面開催ではなかなか参加できなかった遠方メンバーが復活したり、博士前期課程の院生や研究生なども参加がしやすいというメリットもあった。2 期の卒業生から M1 までがオンライン空間とはいえ、顔を合わせる機会はあまりないものなので、このようなネットワークは今後も何らかの形で維持していけたらと思う。といっても、研究会のあとの懇親会での、インフォーマルな議論や交流がとくに院生メンバーにとってもつ意味は大きいので、それが早く再開できるときが来ることを願う。

この共同研究プロジェクトは、研究会には参加できなくても毎年投稿をする形でプロジェクトを支えてくれているメンバーや、気鋭の論文を気が向いたときに投稿してくれるメンバー、ただ見守ってくれているメンバーなどさまざまな関わり方のゆるやかな共同体からなっている。そのなかで何かささやかでも、はぐくんでいくことのできるものがあればと願う。最後に優秀な編集助手をつとめてくれた RA の小倉さんにもお礼を申し上げたい。

木 村　茂 雄
小 杉　世